

学内フィールドから学ぶ「連携」の形
－ピアサポート実践の事例から－

川 島 一 晃
後 藤 綾 文

三重大学共通教育センター
大学教育研究－三重大学授業研究交流誌－
第 22 号 別 冊
2 0 1 4 年 発 行

学内フィールドから学ぶ「連携」の形 -ピアサポート実践の事例から-

川島 一晃 (学生総合支援センター) ・ 後藤 綾文 (学生総合支援センター)

I. はじめに

近年高度な専門性が伴う職種の細分化によって、分業的な社会構造へのシフトが進み、仕事を進める上でも多様な連携が求められるようになってきた。筆者が身を置く心理臨床の領域においては、まさに他職種との連携がなければ仕事が成立しないといっても過言ではない。学校臨床の現場¹⁾における、不登校や公汎性発達障害 (pervasive developmental disorder : PDD) などの支援を例に挙げれば、教師・スクールカウンセラー (臨床心理士) ・養護教諭・保護者といった異なるステークホルダーの良質な連携と協働が適切な支援の要となる。もちろん教育の現場に限らず、会社や工場、病院といった領域においても、異なる機能を果たす他者との連携を抜きに仕事を完全に遂行することは大変に難しい時代になっていると言ってもよいだろう。このような背景を反映するように文部科学省の提唱する学士力²⁾や経済産業省が提唱する社会人基礎力³⁾の育成においても、チームでの連携やコラボレーションに関連する項目が必ず組み込まれている。人材育成の議論において、イノベーション人材が挙げられることも今日珍しくないが、新しい価値や機能を生成する創造的な思考過程においても、異なる機能との良質な「連携」がその前提として位置づけられることは想像に難しくない。このように多様な文脈において非常に重要な概念として「連携」というキーワードが位置づくと考えられるが、これを学ぶことは容易ではない。なぜならば、本質的には、「連携」という行為の概念レベルの理解に留まるのではなく、適切な連携を形成できる学びこそが重要であり、そのためには実際に良質な「連携」を体感的に学ぶことが不可欠であると推察されるからである。実際、筆者自身の職域における「連携」に関する知識・技能の獲得プロセスを振り返ってみると、自身を囲む多様な職種の方との様々なやり取りをはじめ、適切な連携に至る様々な体験⁴⁾を糧に、良質な関係性の形成の勘所や相互の機能の十分な活性化を前提とした「連携のあり方」を学んできたように思われる。

そこで本稿は、共通教育において開講されたキャリア実践科目『ピアサポート実践』において展開した事例を素材にして、学生が学内をフィールドに「連携」という概念を体感的に学ぶことの可能性を検討してみたい。

II. 講義『ピアサポート実践』の構造

『ピアサポート実践』は、ピアサポート宣言 (図1) に示された「多様な教育環境や学生・教員・職員の連携・協働を活かして、学生が自己の可能性を見つけるきっかけづくりをします」という文言の実践を通じて、考えること、感じること、やり取りすることを総合的に学ぶことを目指して開講されている。本稿で紹介する事例では、特に上述の「連携」を学ぶという部分にスポットを当て講義を構成した。講義で「連携」を扱うにあたり、連携する対象が必要となる。連携の成立には双方がその連携に対して何らかの興味と価値を見出していることが重要であると考えられるため、事前に講義趣旨を説明し、

賛同が得られた「広報室」「共通教育事務室」「就職支援チーム」の3つのフィールドを設定した。2013年度後期『ピアサポート実践』の受講者の内訳を表1に示す。講義全体の流れは図2に示されたとおり、オリエンテーション (#1)、個人および集団の「強み⁵⁾」の開拓と「連携」の重要性の確認に関する講義 (#2) を踏まえ、学生はまず先述の3つのフィールドを紹介される。そして各々の興味に応じて、フィールドの調査グループが3つ構成される。調査グループでは、各フィールドが担う大学での仕事の内容等を調べつつ、ニーズのヒアリングのためのアポイントメントをメールにて取ることが求められる¹⁾。そして実際に現場のニーズのヒアリングに出かける。その際、学生にはそれぞれのフィールドにおいて学生が参画することを期待する事柄の有無、各部署が学生に期待するアクションなどについて現場の職員の生の声を丁寧に聴き取ることが求めた。各グループは、ヒアリングの内容について整理し、①どのようなニーズが語られたのか、②学生としてその受け止めたニーズからどのようなアクションを起こすことが適切な連携に成りうるか、について全体に向けてプレゼンテーションすることが求められた。ニーズ調査報告会において、受講生は3つのフィールドのニーズとグループが提案するアクションのアイデアについて聞き、自分がコミットしたいフィールドについて再度選択することが求められた。その際、継続してニーズを調査したフィールドで取り組むことを選択する学生もいれば、プレゼンテーションを聞き、新しい関心に応じてグループを移動する学生もいた²⁾。

¹⁾余談ではあるが、アポイントメントを取るためのメールの書き方についてグループでの検討が不十分で失礼な文面を作成し、教員から注意を受ける場面も生じた。グループの学生達はSAの指導のもと適切な文面への改善のポイントをスライドにまとめ、全体に対してどのような配慮が必要となるかをプレゼンすることが求められた。失敗が全体への学びの大切な素材となる一コマであった。このグループのある学生は「このことでもう二度と同じ失敗はしないと」と述べ、他のグループのある学生は「自分たちも失敗しかねないことがたくさんあった。(仲間が)間違えてくれたから学べた」と述べている。

²⁾ Appreciative Inquiry⁶⁾の実践などにおいても、自らが「今、一番コミットしよう」と思う活動に関与することが最も生産性が能動的に向上すると指摘されている。また動機づけ研究において自己決定理論を提唱する Ryan & Deci⁷⁾は自らどの行動を取るかを選択し、自分で決定を行う場合においてより動機づけが向上すると指摘している。学生は自分自身でグループを再選択するように求められることで、自己決定を余儀なくされ、その行動はそれ以降の活動においてのコミットメントを促進ないしは保持することが期待された。



図1 ピアサポート宣言

表1 ピアサポート実践における受講者内訳

	人文学部		工学部		生物資源学部		受講者総数
	文化学科	法律経済学科	機械工学科	分子素材工学科	資源循環学科	共生環境学科	
1年	2	2	1	1	1	1	10
2年	2						

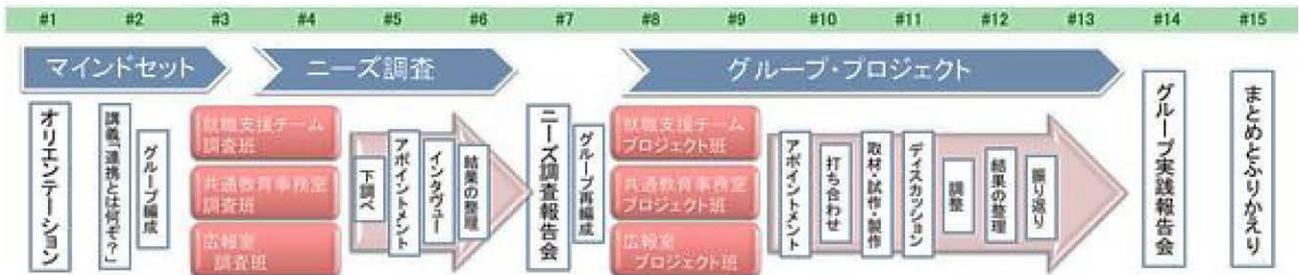


図2 ピアサポート実践における講義の流れ

プロジェクトのグループが構成された後、各グループごとに展開するプロジェクトの内容について検討を行い、フィールドに内容の調整に出かけ、さらに詳細を検討しながら実践につなげるべくグループ別学習が展開した。後に各フィールドごとにどのような内容の実践が展開したか述べるが、学生達は教室におけるグループのディスカッション(図3)に留まらず、現場のニーズの再確認や取材、製作活動とアクティブな実践を展開した。教員は学生のアイデアやアクションに関する主体性を阻害しないように配慮しつつ、安全なグループ活動の展開³と方向性の大きな逸脱に留意しつつ活動を見守ることを心

がけた。SA(student Assistant)の学生およびピアサポート活動に関心がある授業OBの学生(本講義の受講経験のある学生)が各グループ活動をサポートし、グループ活動において生じる困惑や混乱、あるいは受講生からの求めに応じて「受講生と共に考えるスタンス」を基準としながら適宜助言や検討に加わる形でプロジェクトは進行した。

³ PBL形式の実践が隆盛し、重要性が指摘されている今日であるが、一方でPBLなどのグループ活動が苦手な学生の存在もまた留意すべき事項である。3者関係となるグループ活動での討議、意思決定などの作業においては、多様な価値観を受容し、相互尊重の集団規範を形成する枠組みの設定が十分でなければ、集団での活動が苦手な学生においてはその集団における帰属意識に応じて疎外感や不適応感といった必要以上の傷つき体験のリスクが特に生じやすい。学びの場でこのようなリスクが発生しないよう教員は活動中の学生の様子を見守り、状況を適切にアセスメントし、必要であれば介入を図ることが重要であると考えられる。



図3 グループで議論する学生たち

それでは各フィールドのニーズ（学生の参画を期待する事柄、学生に期待したい事柄）はどのようなものが挙げられたのであろうか、また学生達はその現場のニーズに対してどのようなアクションを回答として表現しようとしたのであろうか。表2に学生が捉えた現場のニーズと提案したプロジェクトの概略を示す。次節からそれぞれのプロジェクトでどのような実践が展開したかその概要を見ていくこととしよう。

表2 学生が捉えた現場のニーズと提案したプロジェクトの概要

フィールド	学生が捉えたニーズ	学生が提案したプロジェクト
就職支援チーム	学生（特に1、2年生）に就職支援チームのことをもっと知ってほしい。学生に届く広報はどのようなものだろうか？	学生が作成する就職支援チーム紹介VTRを作成する
広報室	大学の広報活動に学生ももっとコミットしてもらいたい。エックスの紙面執筆など既存の取組みもあるが、もっと活発に協働できれば面白いと考える。	広報誌の学生取材レポーター活動→広報室ブログ記事において学生がブログ記事を作成する（広報誌の発刊期日等の兼ね合いで、広報室からブログ記事作成を提案いただく）
共通教育事務局	共通教育を受けている学生の生の声をもっと届けてほしい。具体的には、例年開催している「共通教育を語る会」の出席者が少ないので、より多くの学生が集い、共通教育について想いを聞かせてほしい。	「共通教育を語る会」の運営サポーター学生として、広報・当日の進行を行う。

Ⅲ. 学生の取組み

-3つのプロジェクトにおける実践-

【広報室プロジェクト】

広報活動に学生も参画してほしいというニーズについて、広報室からは、広報室ブログに学生企画として学生が記事を作成するという具体的な活動をご提案いただいた。広報活動の留意点、ブログ記事を執筆する際のポイントなどを実際に記事を作成されている職員からレクチャーをいただいた。学生達は熱心にメモを取りながら

「学生ならではの目線」で記事を作成しようとして検討が進行した。学生達は記事内容に関する企画書を作成し、内容について広報室との意見交換を経ながら、最終的には①広報室スタッフにインタビューする記事、②学生が大学の中の自然を発見する散策記の2点を作成することを決めた。ここでは紙面の都合上①について報告する。広報室の岩下健士氏の協力のもと、広報室スタッフに対して学生がインタビューを行う企画が成立した。普段インタビューを行う側におられる広報室スタッフにスポットを当ててお話を伺うというところが学生がこだわったポイントであった。巻末の付録1にインタビュー記事全文を示した。

学生たちは、インタビューする係、写真を撮る係、メモを取る係と役割を分担し、インタビューを行った。彼らは緊張しながらもハキハキと質問を投げかけ、岩下氏の語りに傾きながらインタビューを進行した。岩下氏からは、インタビュー後に「柔軟に追質問を行うことでより深い話を引き出すことができる」とインタビューのポイントについてレクチャーをいただいた。記事にまとめる際も、読みやすい記事にするにはどのように書けば良いのか、学生達はグループで検討を重ねている様子が伺われた。

このグループの特徴は、2年生の学生がリーダーシップを発揮し、1年生の学生達がリーダーのもとでそれぞれの強みを活かし合う形の活動が目立った。どうしても学年差があるグループ構成になると、高学年の学生は自然とリーダーとして活動をはじめ、後の表3の学生のレポートの記述にも見受けられるが、「非常に個性的な1年生のおかげ」で、2年生の学生にはグループのメンバーをどのようにマネジメントするかという学びが充実していたと振り返ることができる。またリーダーを慕い頼っていた形になる1年生は、先輩の背中から成長の目標を見出し、各自半期の実践を振り返っている。またそれぞれの個性が際立っていたため、自然と

「君は何が得意？」というやり取りが生じ、それぞれが得意な面でサポートし合うという規範が形成されていたことがグループ活動の背景にあったと言えよう。表3の学生の記述にもあるが、「メンバーの強みの組み合わせ」が効果的に行われることでグループのパフォーマンスは飛躍的に上昇する。しかし、その各自の強みが生きるのには、相互に他者を尊重する関係性が成立していることが前提となる。今回は#2のセッションでメンバーの「強み」と「連携」を関連して論じたことと、活動中に教員とSAがグループを構成するメンバー間に良質な関係性が維持されることに重点をおいて配慮していたことが効果的に機能していたと言えよう。

【共通教育事務局プロジェクト】

共通教育事務局からは「共通教育にもっと学生の生の声を寄せてほしい」という事務局の想いをニーズとして学生は受け取った。そして毎学期開催されている「共通教育を語る会」をより多くの学生が参加する企画としてデザインすることを課題に設定するに至った。学生は共通教育センター長、事務局スタッフと会のコンセプトや広報活動について意見交換し、ポスターの作成、配布ピラの製作、立て看板の製作、Facebookによるweb上でのアナウンスと広報活動に力点をおいて実践を展開した。食堂に協力を求め、案内のピラを設置させていただくように交渉し、より多くの学生に会をアナウンスするために、自分の受講している講義で紹介する時間を担当教員に求めるアクションを起こした学生も見られた。共通教育事務局のニーズが多く学生の声を集めることであったため、教員を含めた学生との議論を経て、会の内容はワールドカフェ方式とし、テーブルを参加者が移ることで多様な意見を多くの参加者で共有できるように工夫した。また参加者のグループ活動でのコメントを促進するために、アイスブレイクとしてディベートゲームを設定し、会場における多様な意見の存在とその価値を保証する枠組みづくりを留意した。最終的にはのべ100名ほどの学生・教職員が来場し盛況となった。巻末の付録2に共通教育を語る会の広報室の記事を添えた。当日の様子については記事を参照していただきたい。

このグループの特徴は、メンバーが受講生2名であったことが挙げられる。共通教育を語る会という比較的大きなイベント企画のため、ピアサポート学生委員会と趣旨に賛同する有志学生の協力を得て、2名の受講生を中心に実行委員会を形成して、プロジェクトが進行した。少ないメンバーで大きな仕事を進めるという枠組みは、

不安や心細さを喚起する。しかし、学生たちは協力を申し出る仲間にサポートを求め、役割を分担する中で進出した。彼らの講義での口頭での発表では支えてくれた仲間への感謝の言葉が幾度となく語られた。筆者が身をおく臨床の現場においても終始感じられることであるが、仲間の支えとつながりを感じることができればこそ、新しいアイデアや発想が生まれていくものである。そして何より、何かを成し遂げたことを共に喜べる存在に気がつくとき、大きな安心感とともに成長を客体として俯瞰して見る視座を得る。そのような時には案外意外な成長を発見するものである。ある学生はレポートの中で次のように述べている。「自分自身の成長については、“人前で話すことが少し怖くなくなったこと”だ。今までは人の前で話すことをなるべく避けてきてしまったが、“共通教育を語る会があることを少しでもたくさんの人に知ってもらいたい”という想いから、自分から進んでたくさんの人の前で紹介することができた。司会をすると決まったときも、司会など今まで一度もしたことがなく、不安で仕方なかったが、いざやってみると意外に楽しくて自分でもできるんだと大きな感動があった。できないと最初から決めつけてはいけなさと感じた。これから人の前で話せる機会があれば、逃げずにやってみようと思うし、できる気がする」という1年生の自信に溢れた記述が見られる。このレポートでは、逃げずに頑張った背景については十分に語られつくしていないが、彼らの実践を最後まで見守り続けてくださった事務室のスタッフをはじめ、一緒に活動した参加者、多くの仲間たちの眼差しに留意することが重要である。その上で今回の体験を俯瞰することで体感として連携の意味やポイントは見えてくるであろう。

【就職支援チームプロジェクト】

就職支援チームでは、1・2年生を中心に就職支援チームをPRすることがニーズとして挙げられた。大学側が情報を提供しようと広報活動を行うが、学生になかなか届かないということは、教職員からよく聞かれる支援ニーズである。就職支援チームは就職活動期の学生の多くが訪れ、相談や情報収集を行う重要な部署であるが、1・2年生の学生にとって就職支援というキーワードは少し距離があるのかもしれない。しかし就職という言葉に不安を抱く学生も少なくない。学生達は就職支援チームと学生をつなぐために、どのような手段が効果的かをグループで検討を重ねた。最終的には就職支援チームを紹介するPR素材を学生が作成することを提案した。学生たちは就職支援チーム、情報コーナー、企業研究会といったイベント取材し、職員へのヒアリングを積極的に行いつつ製作を進めた。実際に完成したスライドを巻末の付録3に示した。

このグループの特徴は3名のメンバーそれぞれが異なる方向性を提案し、なかなか一つのアイデアに絞り込むことが難しかった点である。表3の彼らのレポートの記述にも伺えるが、グループの中でのディスカッションが紛糾していた。彼らの転換点は、PR素材を作成するのであるから、三者三様の素材を仕上げることで、パフォーマンスは3倍となることに着地点を見出した点であった。方向性は多様に存在するが、それぞれが主張している背景には、就職支援チームの存在や意味を学生に届けたいという想いである。それぞれが伝えたいとした就職支援チームの機能や側面が異なるが故に、導く出すスト

ーリーが少しずつ違い、結論がなかなか出ないのである。グループでのプロジェクトで各人が作品を製作するという結論は、なかなか大胆であるが、今回のプロジェクトの目標をしっかり議論した上で彼らが出した回答は適切であったと評価して良いだろう。なぜならば、就職支援チーム取材し、異なる学生が見出す魅力は多様であるだろうし、複数の観点からPRを行うことは広報効果として有効であるからである。

グループ活動でのディスカッションでは、異なる価値観が共有されることが珍しくない。多様な視点を持つ学生がグループに居るということ自体が実に面白い現象を期待させるのであるが、学生同士の体験としては、ディベートゲームのように相手を屈服させるか、持論を曲げるかというパワーゲーム化してしまうことになりがちである。今回の学生達の議論のように、背景にある方向性は共通しており、そこに至る方法論や切り取り方に多様性が生じている場合、単にまとまらない議論として片付けてしまうことは少し早計である。各人のアイデアの価値に耳を傾け、その有用性を並べて議論できることが対話の原点である。チームで働く際には、批判的な思考に加え、対話的な志向性が備わっていないと関係性は崩壊してしまう。そしてこのグループにおいても、教員、SAによる安全なディスカッション環境への介入と配慮が彼らの議論が単に攻撃や妥協とならず協調的なものになることに寄与していたと考えられる。

ある学生の記述に以下のようなものが見られた。「自分はいつも主観的に物事を進めてきたが、複数人数で物事を進める時に、他のメンバーの意見を丁寧に聞くことの重要性も学び、チームでプロジェクトを進める中では、そのプロジェクトを主観的に見がちになることに気づいた。そんな時こそ客観視して他の人からアドバイスや意見をもらうことの重要性を知った」このように、主観的な見え方と客観的な情報を検討しようとする姿勢は、非常にバランスのよい検討の視座と言える。一方に偏ることを避け、全体の視点から今のようなことに向っているのか理解しようとすることは、特に青年期を生きる彼らには重要な体験である。自らの主観的な世界で格闘する青年期の学生にとって、まずは自らの現状を言葉に表現することが大きな課題と言えるが、他者との対話的交流の中で現状を確認し、向うべき指針を確認していくプロセスは彼らの成長のステップと言えよう。そして最終的に自身が成し遂げていることを自分の言葉として語れるアイデンティティを形作ることは、青年期から成人期に移行するための重要な発達課題⁸⁾である。キャリアという文脈で言い換えれば、就職活動において求められる「あなたはどんな人なの？」という問いに回答を与えることでもある。その重要なポイントについて実践を通じて、自身の取り組み方の特徴を言語化し、困惑した際にこそ他者との交流にその解を見出せることを発見したことは意味深い。

IV. 学生の学び

さて、これまで若干述べてきたが、半期の実践を通して学生達は「連携」をどのように捉えて理解したのだろうか。学生に課した最終レポートから「連携」と「成長」に関連する記述を抽出し、表3としてまとめた。

レポートの記述を読む限り、受講した学生達は概ね「連携」について、正しい概念の理解をしたと言って良いだろう。独りよがりにならず、ニーズに応じたアクションが必要であり、同時に協働が機能していることが重要であることを理解したことが彼らの記述から読み取れる。良質な連携の成立には、両者のニーズがきちんと共有されているか、目的はきちんと共有されているかという確認の作業が重要である。学生の記述にそれらの点が確認され、また講義の実践の中でも苦慮しながらも学生が実際にそれらのやり取りを少なからず体験したことに意味がある。しかし、本講義が目指した「連携」を体感的に理解するという点に関しては、授業者が期待した教職員との関係性の中で連携となった部分は十分言語化されていなかった。異なるステークホルダーとして大学にいる職員・教員・学生の三者が協働することで、見えるそれぞれの意識や強みがある。この発見が両者でしっかりと共有されることが連携にとって重要なポイントであると筆者は考えるが、この点は十分に体験するに至らなかったようである。授業者としての反省は、実践が可能な時間が限局しており、十分な関係性を形成するほどコミュニケーションが保証できていなかった点、授業内でプロジェクトの遂行を促すことで学生は連携している（という関係性）以上に、成果やパフォーマンスに意識が向いてしまう枠組みとなっていた点である。長期的なプロジェクト活動となることで、連携における相手と自分について十分に振り返る素材が保証されるのかもしれない。また1・2年生の受講生が大人と連携するという

枠組みでは、どうしても受け身となってしまふことが多かったように振り返られる。学生達のレポートの反省や課題点の中でも学生の能動的な動きや意識について記述が見られることから、能動性の発露を促す教育的支援についてより検討を加え反省する必要がある。

しかし一方で、受講生同士や担当教員・SAとの関係性において、学生達は「支え・支えられる」という関係性をしっかりと体感したようである。学生達の活動を観察し、実に興味深いことは、上手く機能しているグループになればなるほどグループの中での支援者・被支援者の役割が常に交代することである。講義タイトルの「ピアサポート」とは“同質の関係性における相互支援”を意味し、困っている時に周囲にいるサポートできる人がそっと支援する営みを指す。良質な関係性が形成されている一つの証拠でもあろう。そして関係性が展開すると学生のレポートにもあった「個人の強み」を活かすことに自然とつながるように思われる。今回のプロジェクトであった大きな連携は、学生達の身近にある隣の人間との小さな連携の延長線上にあることを忘れてはならない。最終レポートや授業内でのコメントにおいて、仲間とのコミュニケーションや助言に言及した学生達がそのことに留意して今後体験を重ねてくれればと思う。

V. まとめ

最後に本講義における「学びの振り返りアンケート」結果を表4、表5、図4に示す。

表4 学びの振り返りアンケートにおける4つの力に関する項目

項目	平均値	かなり身についた	ある程度身についた	少し身についた	わずかながら身についた	全く身につかなかった
1 この授業は「感じる力」を身につけるのに、役立ったと思う	3.00	30%(3)	40%(4)	10%(1)	10%(1)	
2 この授業は「考える力」を身につけるのに、役立ったと思う	3.20	40%(4)	40%(4)	20%(2)		
3 この授業は「コミュニケーション力」を身につけるのに、役立ったと思う	3.30	50%(5)	30%(3)	20%(2)		
4 この授業は「生きる力」を身につけるのに、役立ったと思う	3.20	40%(4)	40%(4)	20%(2)		

*括弧内は回答者数

*項目1は無回答者1名

表5 学びの振り返りアンケートにおける学びに関する項目

項目	平均値	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1 総合的に判断してこの授業に満足できた	4.80	80%(8)	20%(2)			
2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した	3.60	20%(2)	60%(6)		20%(2)	
3 この授業の内容について理解できた	4.20	30%(3)	60%(6)	10%(1)		
4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。	4.50	50%(5)	50%(5)			
5 この授業の受講によって、学業への興味・関心が高まった	4.50	50%(5)	50%(5)			
6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり、実際に試してみたりした	3.90	40%(4)	30%(3)	10%(1)	20%(2)	
7 学びを深める為に、調べたり尋ねたりした	3.90	30%(3)	50%(5)	10%(1)		10%(1)

*括弧内は回答者数

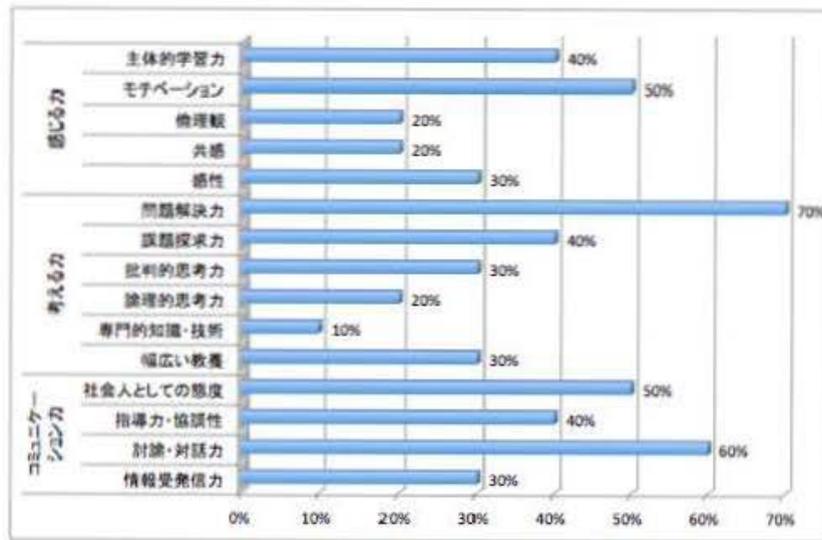


図4 4つの力の下位要素に関する学びの項目

「連携」という概念の体感的な学習を目指した本実践であったが、上記のアンケート結果からは、連携を体感したかは別として、学生たちは授業での学びの体験から十分に感じとり、考え、そしてコミュニケーションを図ったと理解してよいであろう。特に表5（項目6）に示されるように、講義において学んだ概念を実際の生活の中で意識しようとした点は特に重要である。教室での学びから、彼らの日常生活の中に汎化、応用されることが彼らの生きる力の涵養の上では欠かせないからである。そしてこのような彼らの学びが成立したのは、ひとえに多忙な職務の中、講義趣旨に賛同し協力を申し出たいただいた広報室、共通教育事務室、就職支援チームの職員の皆様のおかげである。この場をかりて心より御礼申し上げたい。講義全体を通じて、学生たちのディスカッションにおける語りから、働く大人の背中から「熱意」や「真剣さ」の形を学び取っている様子が散見された。身を以て大きな背中を示していただいた授業関係者に謝して、本稿のまとめとしたい。

VI. 引用文献

- 1) 小川捷之・村山正治 (1999) 学校の心理臨床 金子書房
- 2) 文部科学省 (2008) 学士課程教育の構築へむけて 中央教育審議会答申
- 3) 経済産業省 (2006) 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」
- 4) 皆藤章 (2010) 体験の語りを通して 誠信書房
- 5) Aspinwall, L. & Staudinger, U. (2002) A Psychology of Human Strengths: Fundamental Questions and Future Directions for a Positive Psychology. American Psychological Association.
- 6) Diana, W. & Amanda T. (2010) A The Power of Appreciative Inquiry: A Practical Guide to Positive Change. Berrett-Koehler.
- 7) Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000) Self determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- 8) Coleman, J. & Hendry L. (白井利明他訳) (2003) 青年期の本質 ミネルヴァ書房

付録 1

学生企画「三重大学の職員にインタビューしました！」

2014年2月13日

清水加奈子（人文学部2年）
六谷修樹（人文学部1年）
小野晃平（人文学部1年）
小宮祥悟（工学部1年）
安井 廉（生物資源学部1年）

みなさん、こんにちは。私たちは共通教育科目「ピアサポート実践」（川島一晃講師、鈴木英一助助教）の受講生です。ピアサポート実践は学生と三重大学の職員のみなさんと連携・協働をテーマとしたキャリア教育科目です。

今回は授業の一環で昨年12月20日に、普段、三重大学の広報誌『三重大学X（えっくす）』などの編集を行い、三重大学の広報活動をしている事務職員さんにインタビューしてきました。インタビューにお答えいただいたのは、企業情報部総務チーム広報室の岩下健士さんです。



—本日はお時間をいただきありがとうございました。日頃あまり学生と関わることがない三重大学の広報室の職員さんですが、どのような仕事をされているのですか。

岩下
広報誌の編集。三重大学に関わる出来事取材してHPのブログに掲載、記者会見の開催など様々な広報業務を行っています。

—なるほど。では、この仕事のやりがいは何ですか。

岩下
広報誌のアンケートに「毎週、読むのを楽しみにしています。」などの感想が読者からもらえた時にうれしいと思うことです。

—それは、心にしみますね。では、なぜ、三重大学の職員になろうと思ったんですか。

岩下
三重大学の中期目標では、「国際化」に関する目標が掲げられています。それに少しでも貢献したいと思い、三重大学の職員になろうと思いました。最初は、国際交流チームに配属されました。

—では、この仕事での目標はありますか。

岩下
少しでも三重大学の力になって、三重大学の名前を世界に知ってほしいです。



—熱い気持ちがあるんですね。三重大学の学生に知ってほしいことは何ですか。

岩下
三重大学が環境先進大学であることなど、もっと自分たちが通っている三重大学について、知ってほしいです。

—そうですね。まず三重大学に在籍している私たちが三重大学を知らない、外部の人に三重大学を知ってもらうことは無理ですね。そんな熱心なあなたにとって「広報」とは、

岩下
三重大学と三重大学以外の人達をつなぐコミュニケーションですね。

—最後の質問ですが、趣味は何ですか。

岩下
旅行です。旅行先の風景を写真にとることが好きです。

—今日のインタビューの感想を聞かせてください。

岩下
いつもインタビューする形なので、今日は貴重な経験でした。

—今日はありがとうございました。

最後に ～インタビューを通して感じたこと～

実際にインタビューをしてみることで取材やインタビューの難しさを体験することができました。その一方で、お話を聞いて、読者からの感想のほがきという形で自分の仕事のフィードバックを得られるなど、やりがいも多く充実した仕事であるという印象を受けました。また、同じ学内でも職員の方と話すことはないため、日頃聞くことのない職員の方の仕事の内容ややりがいなどを聞くことができ、貴重な経験となりました。

岩下さんを見て記念撮影



インタビューにご協力いただきありがとうございました。

ピアサポート実践受講生

付録2

共通教育を語る会一見たい！聞きたい！言いたい！一が開催されました

2014年1月22日

1月22日（水）、第一食堂2階において標記会合が行われました。

オープニングとしてピアサポート実践を受講している学生が司会となり今回の趣旨の説明があった後、「第二外国語の必要性」について学生プレゼンテーションが行われました。



学生プレゼンテーションの様子

プレゼンテーション後にディベートゲームが行われ、学生からは「第二外国語はいるのか」という質問に「海外に行っても英語が喋れば十分にコミュニケーションが取れる」という積極的に肯定する意見がある一方で「共通教育は必要？」という質問に「大学では専門的なことを学びたいから必要ないのでは」などの意見も出されました。

次に学生総合支援センターの川島一見講師をコーディネーターとして一定の時間ごとにグループのメンバーを入れ替えるワールドカフェが行われ、「大学で身につける『教養』とは何だろう」と「僕たち・私たちが本当に求める共通教育の未来像」をテーマに話し合いが行われました。学生はキーワードから連想される言葉を思い思いにポストイットに書き込み、各グループに配られた模造紙は次々と彩られていきました。



それぞれの考えを書き込み、説明をする学生・教職員



この語る会は平成23年度後期に始まり、今回で5回目ですが、80人（教職員を含む）を超える参加があり、大学の教育をもっと良くしたいという学生・教職員の想いが溢れる有意義な機会となりました。

付録3

就職支援チーム
～ガイダンス編～

皆さん就職について何か考えてますか？

就職なんてまだ先だし
不安だけど何したらいいの？
助けて下さい

二年だけ分かんない
一年生の間にしたいけど分かんない
企画に参加できるのかなあ

そんなあなたに

就 職 支 援 チ ャ ーム

就職支援チーム

就職支援チーム
学務部就職支援チームと連携。
就職ガイダンス、
学内企業研究会、
就職情報の提供、
就職相談等を行っています。

場所
～PLACE～

総合研究棟Ⅱ

総合研究棟Ⅱ

Turn right!

Go straight!!

Here!!!

そんな就職支援チーム
では学生のための様々
なガイダンスを行って
います

ガイダンス風景

学内企業研究会
mic
学内企業研究会
12月21日～23日・24日・25日

学内企業研究会
VICTORY ROAD
12月21日～25日に行いました
たくさんの企業と学生が参加
しました!!

いかがでしたか？

皆さん是非
就職支援チームに足を運
んでみてください!!!

この他にも
パネルディスカッション、
エントリーカードの書き方を始め
日程表の読み方講座や先輩から聞く就活体験談
など
一年生からでも参加出来るイベントもあります!

Thank you
for
watching!